

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

熊澤了介先生事跡考 全

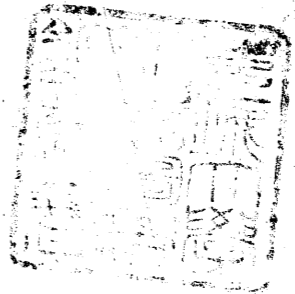
和發堂主人清負

283.1

タイトル番号：0067

書名：熊澤了介先生事跡考

1冊



叙

書云乃言底可績吾

蕃山先生之言其庶幾

乎而我備國乃其底績

之地也故天下之欽仰先

生者莫若我備人之欽

卷之七

仰先生者莫如若清水翁
之於先生可謂篤信矣
凡其所著述悉搜索而
騰寫之曰是猶律度量
衡之必有用於世也翁又
考覈先生事蹟并錄其

書目以詔同志皆勸公往
世翁愧之不久予曰何以
文為先生之書既以可績
傳非以文辭也翁固以質
行長者聞其言以之信
於人則天下之欽仰先生而

欲知其逸事觀其遺書者
皆徵於斯考矣所謂律度
量衡之為用非待玄纒
璣組之飾者何以文為乃
序授梓文化甲戌余月閑
谷武元君立題



熊澤了介先生事跡考

備前 清水卧遊隱士



熊澤先生諱ハ伯繼字次郎ハ後助右衛門ト改む
本姓ハ野尻トシテ加藤嘉明の臣野尻孫兵衛一利
ウ子ナリ一利ハ尾張の人ナリ後京都に寓居ス
故了先生平安の五原ホケノ元和五年己未ナリ
外大父熊澤半右衛門守久著シテ嗣ク了トシテ其
姓ト冒ケ守久初の名ハ善三郎トシテ了ナリ父
と年三郎トシテ尾尻ノ人ナリ三方原ハ我仁廿二歳

ふく平の基を信門と一野ふ働き討死と書三郎
守久柴田勝家了けし後福嶋正則にけし足利の
幸ふ長より正則安藝備後國を割りけし信州川
中崎ふ敵逐せし時正則の及多く逃散す死士
七人僅に残止まけり守久其一人より正則の戸を
出り川中嶋に赴くを途として殺さるべし流言あり
守久驚とちて信州ふける正則國士に遇せり
しと悔られり後水戸威公へけし路遇せられし
ふく死る實乃父野尻一利の嶋原の役ふ鍋嶋侯

に属しし勇我し鳥銃に中し疾愈く後備前
あり延寶八年庚申八月廿二日池田丹波侯の邸ふ
幸守享享九十一回國を氣那蕃山村た右田山に
葬る侯先中ふ代りて篤く敬慕しし其亦有徳の君子
伯継仲愛とを子にもせり芽也た翁より此翁の
妻く死をものなり情むべし侯
幸より蕃山のついでに後り見せり一利の妻名は龜越氏
寛文十庚戌歳四月十日享享六十九回國中野那
南方村より幸守一利より先に左右田山に葬り
先生幼くして岐嶽寛永十一年甲戌年十六京兆尹
板倉周防侯の吹率にふりて備前にもりけし是

庚の遠族あつふらる十四年丁丑鴻巣の賊起る同
 十五年戊寅早春 烈公 諱ハ光政官為少將字新太郎
本姓池田賜松平諡曰芳烈公
 官命と奉して江戸より岡山にうつるこれ賊猶不
 敗ハ師と出されんう為と 公より先生の佐僚
 かつとて鴻巣援兵の選す不充らる然とも備前
 兵より發せりしに賊敗りたり此時先生年二十
 潜ふみしりく今の勢れや多く俸祿を増賜えき
 命あらんとい然るる文武の道と不學と進む
 人士尊ぶ所ふあつび若登庸せしむと如何も命

と道とんとして遠く岡山とてより一近の岡相多に
 居り 叔系伊庭氏の
先生祖の外戚 歳餘して書又一利と師より
 信武の道と傳り一亦一己無益の上夫ありしや
 精神疲れ病氣にありて後二十二歳の時とらて四書
 の文字讀とるれ朱子の集註ふらて其旨と求む
 二十四の七月高嶋於小川村ふけと藤樹先生と 姓
中の諱ハ惟命
字ハ與之庵門 師より事と道と問れ疑とを質と尋て亦
 九月高嶋ふけ其甥の年四月やとて去る迄になて
 孝經大学中庸とて 集義外
書卷六 といふ

信謹んで接す
烈公の旅行にも
今国学の文庫に
在る所の老師の學
を篤く受用す
るふ足より又
公に仕下諸士に
老師の門人多く
民間にも多く有
て其君臣の交際
民の風俗と世に
傳へると用ひ唐虞
の古人も多し
是れゆゑ又白石先
生も翁同龢の書
より志を興され
て大儒といはる
れは終にあらん今
の近江の聖人と
云ふも其書
も世に稀なり信
漸古稀に在るに

信謹而此意と推ひ此三つを經傳に於て易
經とも言われりといふことより記されりし謙
あり其微の和者易の聖人といふも濟者
といふ思はれしなりといふ事なれば微の藤樹老
師曰翁同龢
下巻之本 本来易經一部とせしめりし
十三經もれり易經とせしめりしは易經とせしめりし
易經の簡與玄妙より凡支の取入ありけりたふ
しより孝經大學中庸とせしめりしを續て易
經といふれり大綱の得心ありやと三書とせしめ

信謹んで接す
烈公の旅行にも
今国学の文庫に
在る所の老師の學
を篤く受用す
るふ足より又
公に仕下諸士に
老師の門人多く
民間にも多く有
て其君臣の交際
民の風俗と世に
傳へると用ひ唐虞
の古人も多し
是れゆゑ又白石先
生も翁同龢の書
より志を興され
て大儒といはる
れは終にあらん今
の近江の聖人と
云ふも其書
も世に稀なり信
漸古稀に在るに

て解力あるもの其力と際にはほめて語益とせし
べりしは又解力あるもの十三經とせしめりしは
一亦史書とも讀べし史書の古今の事象と
考へ福善禍淫の印証とするものも解力に
感ふ所讀むものなりと考べしされり十三經とせ
しめりしは易經とせしめりしは易經とせしめりし
の外の三書の外の三書の外に易經とせしめりし
せむのいふより明德は發る地の妙用却て枯渇
れりしは易經とせしめりしは易經とせしめりし

其餘の書の面々のつらつら次第にまよふと得んて
 ふうも志とてなご心算とて我所依りやひま
 忠信と主とて一行住坐臥の時にあひ其まよふと
 求り心もちとて廣くゆるゆるふくく悔意をひま
 必と悟りてと用くば其違きと速きつとわつま
 明暗習の法違ふとてとて武の事を廣く
 重く全る意孝經と主とて示されり亦熊澤
 先生に和書に述らるゝの易孝經の待對の書也
 易と行ゆくと孝經と行高くとて習とて孝經

先生没後古文孝
 經出孔安國の傳
 に古文孝經二十
 二章載在竹牒其
 長尺有二寸と云
 然則是十二月の
 象也

四段の教あり第一原理より第二極功と春夏
 の道ふ配と第三の五度して心法を示し第四
 段の變を説く秋との義に配したる又云易
 のいふとある所入事と書詩禮春秋の既にもつ
 てもありと云帝堯易の心法を工まかりして
 執中を受用と人舜に授けりて中庸解ふと
 堯舜の只中とのいふもは後世唯中の字のい
 庸の徳のまごごかふ孔子中字のいらり中庸字
 とのいひゆいで中庸と教ふるなりや大學の周乃

大學校のとりとれは正意正心よりは國乎天下に
 つくる成人の道也 萬本にありて註をわけるに
藤村先生の孝廉解に詳なり 此の
 故に孝經大孝よりけり或同とほくしてより皆易の
 用をねてより此書も眼をくみあはしめて終るを
 終るは此二書も冊よりして六經盡くすのみなり
 集る故くして時所位と説くは易と孝より要
 多れどもなり又云漢儒の訓詁宋儒の理學王子
 の心法皆聖學の全体あり一とも闕べし初
 学の先朱ほくよりくはくもく義とくたまへ

くれり徑人どもを續けはくは經と以て徑と
 解し聖人に直に對しきるぶぶの意思せよ
 るものありて又云孝經の孝と主とて説く人
 ば孝主と成てに孝より論語の仁と主とて
 説く人どもにきくたりて孝客とある此一隅を
 以て其三隅のみせば書と續けく書主と成り地
 經客と成り詩と續けの詩主と成り地經客と
 成るのこゝも言外の榮念よりして六經も易の
 六爻に似て升降して窮盡するは終り地乃好

用獨易書のふふありたり又一定して觀と
 且明の何氏の所謂易體也春秋用也垂書詩
 以寄禮樂聖人治世之跡所以流露于體用之間
 者也亦大に約ツクメテとれを易考經の流行ともより
 是皆先天後天の理なり邦を異し時を同く
 一と共うたると唱程朱の言と助くありに
 感ちれ何氏の說と交て先生の言の大畧と述
 けり其學の淵の令師先師藤樹の言と擴充と
 して新なり

既して五月相ふに歸り又伊尾氏はともりて
 江戸に居る先生の東近江の人遠く城を捕り
 母と妹と共に八人あり止りて養ふと家も食
 りに州賤民の食新ゆりてと命と命と魚肉酒
 等を賣りてと清水紙子振りと定と徳と
 精と勤とを脩りて三四年其間相識の人母
 兄妹のありと縁に及ぶんとと憐れはと求むられ
 肯ウケカたざるの頃亦中江氏玉陽翁の書と讀て
 良知の心と悟りて先生ふとて大に心